

## 猫のいる風景 全編(第一話)第五話

## 第五話 土用藤の幻覚

たなか 踏基

400字詰原稿用紙 全編200枚書き下ろし

平成十七年十一月十五日脱稿

## 夏藤や諏訪の社に異国人・踏基

東南アジアの国々では、珍しい土着の猫が時々発見されることがある。シンガポールと命名された猫もそうした一種である。

元々某アメリカ人夫婦が、一九七四年に現地で見付けた三匹の猫は、とても小さく従来欧米種にはない独特の表情をしていた。

翌年、夫婦は猫を連れ帰り、「シンガポラ」と名付け繁殖を開始した。一九八〇年には、他繁殖者もシンガポール観光で、同じ特徴を有する猫を連れ返っている。新種として第一段階の血統登録が、米国ニュージャーシーに本部のあるCFA(Cat Fanciers' Association)で、七年後に認められたといわれる。

因みにCFAとは、猫の品種改良により遺伝的な欠陥を排除した、猫の血統種の健康促進を目的とし、アメリカ全土、カナダ、南米、ヨーロッパ、アジア、ロシア及び日本に所属クラブ六百以上を数える、世界最大規模の愛猫協会として活動する非営利団体である。

シンガポールの街角で偶然に発見されたというシンガポラ種の猫は、クルット愛くるしい目玉と、大きな耳、丸みある顔、セピア

色した短い毛質の甘えん坊猫で、人懐っこい性格の小型種である。成猫でも二キログラムに満たない体形である。この奇妙なシンガポラ種は、一九八〇〇先ず米国で人気化し、一九九〇年代以降日本でもファンが増えている。

東峰 西峰と二つの峰を有し、杖突峠から上る高遠の守屋山は、標高一六五〇メートル余りの山である。実は、下諏訪町(海拔七三二メートル)の北西部にも、標高八五〇メートル余りのもう一つの守屋山がある。山というより小さな丘陵に近いが、本当は守屋山でなく、御射山みさやまという名がある。

諏訪湖を挟むようにして、南側に諏訪大社の上社があり、北側に下社があった。諏訪大社は、信濃国一之宮で、上社と下社を合せて一社を成している。諏訪湖の南北に二社ずつ、四ヶ所に鎮座する由緒ある神社である。

上社はそれぞれ本宮(諏訪市神宮寺)と前宮(茅野市安国寺)、下社は秋宮(下諏訪町上久保)、春宮(同町大門)に分かれていた。全国津々浦々に分社・分霊の、お諏訪様、諏訪大明神等一万余社を越える神社の総本社である。

諏訪大社の御祭神については、古くから上社の男神、下社の女神の信仰が広く伝わっている。共に本殿は無く、上社は高遠の守屋山が、

下社は御神木が夫々御神体である。社殿は、本宮が諏訪造で、他は神明造の拝弊殿である。主祭神は、出雲大社の御祭神として祀られる大國主命おおくにぬしのみことの次男、建御名方たてみなたのみこと富命とみのみことである。古事記の出雲の国譲りの時に、科野国州羽しなののくにすわに退き鎮座したとされ、上社に祀られている。

妃神やまがたのみことの八坂刀売命やまがたのみことは、下社の主祭神として御子神と共に祀られ、下社春宮、秋宮と交互に遷座する。遷座祭は、二月一日、八月一日である。今は暖冬のため、諏訪湖の全面結氷は極稀である。昔厳冬の湖面を氷が盛上って割れる現象が起ると、それを「御神渡り」と呼称し、神の妻問いを仰ぐ粋な神事すらあった。

下諏訪の守屋山の由来は、定かではない。山の名は御射山みさやまなのに、何故地元の人々は守屋山と呼んだのであろうか?上社から南に聳える高遠の御神体の守屋山を羨やんで、何となくそう呼ぶようになったのかもしれない。

全国的に分社を有す本宮の諏訪大社といえ、先ず御柱祭のことに触れねばならない。御柱祭は、七年目ごとの寅と申の年に行われる。出雲大社の大黒柱、伊勢神宮の心柱、諏訪の御柱が日本三大奇祭と言われている。

「式年造営御柱大祭」は信濃国挙げての最大規模の祭りだ、起源は約千二百年前の平安時代まで遡る。上社と下社に分かれ、夫々四月に山出し祭、五月に里曳き祭が行われる。

上社は八ヶ岳・御小屋山の大神社有林から、下社は霧ヶ峰に近い下諏訪町東俣国有林から、いずれも、直径四尺ある樅もみの巨木を切り出し

て曳く。四つの社の拝幣殿、宝殿を中心とした社殿の四方、正面に一之、二之御柱を、裏手に三之、四之御柱が建立される。

ついでながら、この下社秋宮の三之御柱は、堀新田町の曳子がひいた御柱で、山出しの最も危険な「木落とし」で平尾郷の二人の若い曳子が六十五石の御柱の下敷きになり、圧死したという因縁付の御柱であった。

昔から、この曳衆が樫の巨木に跨り一機に坂を下る「木落とし」は、御柱祭の最大の呼物で、諏訪地方の血気盛んな若者や祭り好きの壮年衆の心を躍らせる光景であった。毎年死傷者や怪我人が続発し、逸話も絶えなかったが、怪我は地元の曳子にとって不名誉とされた。

目通り八尺二寸長さ十二間という太さからして当然、下社秋宮の神社正面に相応しく、二之御柱として充分過ぎる程の御柱だった。この血を吸った因縁の御柱の地面から三間程の高さに、くつきりと血痕が残ったと伝えられるが、今ではその痕跡も見当たらない。

人間二人の死傷事件のため格下げとなり、三之御柱として神社裏手に曳立てられた。死傷という不名誉の格下げを、堀新田町の曳子が残念がったことは言うまでもない。

こうした出来事を面白可笑しく口伝する者が、亡くなった今では、そうした土地の逸話もすっかり風化してしまったようだ。

上社例大祭は御頭祭といわれ、四月十五日に実施される。古くは猪鹿の頭七十五頭を俎に載せて、神殿に供えられたと伝えら

れる。その神事の名残として、木の猪鹿の頭をそれぞれ一つずつ大きな杉の俎に載せ神殿に供える儀式が今でも現存している。

下社例大祭は、八坂刀売命やまかたのめのみことと御子神との遷座祭で、別名お舟祭りと呼ばれている。二月一日に春宮にお遷した、御子神の御霊代を神幸行列で八月一日に御遷座する儀式がある。

御射山みさやまの中腹の下社秋宮と、それより西側寄り平地の春宮の距離は、一キロメートル余りであった。秋宮の境内にある展望台から、鬱蒼とした春宮の森は容易に見下ろせた。元々下諏訪は、江戸は日本橋を発ち、中山道の第二十九番目の宿場町として栄えた。古くから湯治客も多く、長久保、和田の宿を経て難所の和田峠を越え、町に入る左手に春宮の社が旅人を迎えた。

春宮から秋宮に行くには、昭和十六年に完成した堀新田町へ通する新道を利用した方が交通の便は良かったのだが、急峻な石段を登っても行かれた。新道とは、迂回するならかなバス道で、守屋山入口の停留所でバスに乗ると、次が春宮前で、次が秋宮前であった。

急峻な春宮から秋宮への石段は、春宮裏手の奥まった三之御柱の根本から始まっていた。

石段の登り口に、苔生した鳥居と祠があった。少し離れて樺の巨木があり、祠の傍に小さな藤棚があった。樺の巨木に圧倒され、隠れるようにひっそりとしていたため、地元の人達ですら、石段下の藤棚に気付く者は殆どいなかった。

藤棚は、石段を登りきった場所の秋宮にもあった。だから春宮と秋宮に夫々一つずつ、

藤棚はあったのである。華やかな長い花房こそないが天然自生の若い山藤だった。しかし、約五メートル四方に広がる小さな二つの藤棚の下に入ると、命を育む若い鼓動が聞こえてくるようだった。

黒澤平助は、被っていた麦藁帽子をとり、天を仰ぎながらシャツのボタンを外すと、ばたばたと胸に風を入れて一息ついた。

風が微かであった。微かな風であったがこの石段で十分もいたら、汗がひくような気がした。石段を登ってから、略春宮と秋宮の間と思われるあたりに、巨大な綾杉があった。神功皇后が剣の鋒と杖を埋め、その上に御鎧の袖に挟まれていた杉の葉を地面に挿して目印としたものから根を生じ、巨木となったものだという。

石段の登り口で、鳥居を潜り五十段も行くと、そこで石段が途切れて赤いばらばらとした砂道がしばらく続いた。更に三十段も登れば、苔の付着した石段が再び現れるという風に、所々途切れ途切れの状態が秋宮まで続いた。

でも、昔はこの石段は途切れることなくずっと上まで続いていたに違いない。老樹木が枝を交えて、鬱蒼とした影を落とす光景は夏には涼味万点だが、春秋にはそれが返って一抹の寂寥感を与えていた。

冬には、枝からととととと音を立てて落下する雪の音が聞こえ、夏には麦藁帽子を被った土地の子供達が捕虫網を持って行き来した。平助は背負っていたリュックを下ろして、

石段の途切れたあたりで小休止した。眼を上げてるとベタリと夏が貼り付いて来た。

高い杉の葉末が夏の空を切り刻んだ。

天界の愛に導かれかのように、蝉の声が降ってきた。微かな風が、蝉の声を干渉させて其処だけ「ワーン」と唸っていた。

石段と平行する小川の急な流れがあった。

平助は地下足袋を脱いで、小川の縁に腰を下ろして足を浸した。汗とほこりでねばっこの足の指の股が生き返った。重い米を背負ってきた疲労感がすーと抜けて行く快感だった。痺れるような快感が、指の股から足首にまでじんと伝わって、やがて大腿から内股にまで這い登ってきた。

平助は腰の手拭で水滴を拭って地下足袋を履き直すと、リュックを背負って再び石段を登り始めた。登りながら、額をこしこしと手で擦った。擦ったところから、黒い垢がこぼれ落ちた。垢は生きている自分の証なのだ。

でもこの垢は額の垢なのだろうか、手の垢なのだろうか。皮膚を擦るところで死んだ細胞がこぼれるのが不思議でならない。

急に風が止んでしまったかと思っ

た。汗が、これでは一寸も蒸発しやしないじゃないか。風が止むとやはり暑い。汗は、これでも蒸発しているのだろうか。風の神様、一寸ばかり吹かしてくれよ。山の風ソヨリ、森の風ソヨリとね。

時折、思い出した風が、身体の深い内部から吹き出物のように表面に湧いて出た汗を、

首から腕から、おでこから鼻から、運び去って行った。でも、これっぽっちのお涙風じゃ、心地良いとまでいかないんでね・・・風の神様、山の風ソヨリ、森の風ソヨリですよ。

平助は、山の風ソヨリ、森の風ソヨリと口の中で、繰り返しながら調子を付けて登った。リュックの中の五升の米が揺れた。

平助は、妙にかん高い喚声を耳にしたように思った。それは「ウワー」でもければ「キヤー」でもない。獣じみた叫びにも聞こえるし、生まれたての赤子が泣いている様にも聞こえた。一人の声が聞こえてきたと思うと、次には大勢して怒鳴っているようでもあった。

思うに昔、インドか何処かで捕まったという狼少年は、きつとこんな奇声を発しながら山野を駆けていたのかもしれない。金属的な響きかと思うと、人なつっこい趣もある。

平助の視界の中に、やがて小さくそれでいて強い緋色が入ってきた。

石段の上方に緋の袴を付けた巫女だと思っ

た。平助はその声の主が、発狂しているのではないかと疑った。ひどく烈しく、不安定で不安で、危険な光景に平助は眼を凝らした。

燃えるような緋の鮮やかさに、平助は狼狽したりとも止つていなかった。

瞬間にはもう前後に動いたかと思うと、次の瞬間にはもう前後に動いていた。平助は極度の近眼だった。眼鏡を掛けて来なかったことを後悔した。

自分の視力が恨めしかった。発狂した巫女を目撃するという、劇的な場面の目撃者になれるかもしれないと思っただけからだ。平助は、今にも緋色の袴に足を纏れさせながら、石段から転げ落ちてくる巫女を待った。

それは、子供達の一団だった。他は全部白いランニングシャツを着ているのに、その不思議な子だけが全身真赤だった。その男の子の赤が、大勢の白を圧倒して際立っていた。お手製の真赤なシャツを着て、これまた同じ生地短いパンツを穿いていた。顔立ちも、洗練された都会風の面立ちで、髪の毛は幾分かールして、混血ではないかと思うほど色白の美しい男の子だった。白いランニングの子供達は、明らかに土地の田舎の悪童どもで、てんでに赤服の男の子を弄りながら、囃してていた。その喚声が、空中を突き抜けて、緑の木々の間に木霊を作って甲高く反響していたのだった。

上方に位置する赤服の男の子の方を振り仰ぐと、悪餓鬼どもは立止まって手でメガホンを作りながら下方から一斉に叫ぶ。

「赤、赤、赤ちゃん、赤ん坊!」

「赤、赤、赤ちゃん」とやっておいて

「赤ん坊」

と引つ張つて、更にそれを二三回呼ぶ。

「ほら、悔しいか。」

「悔しかったらここまで来い!」

その時、突然赤服の男の子が泣き出したのかと思っただ。その声が、金属音に変わって悪

餓鬼どもの頭上を突如襲った。

「キヤーン キー！ オーヒャー！」

その気合とも呪文ともつかぬ奇声に、悪餓鬼どもは、くるりと背を向けて一目散に駆け下つてきた。もう安全と思われる所で立止まると連呼した。

「赤、赤、赤ちゃん、赤ん坊！」

「悔しかったから此処まで来い！」

「泣きたいかーほら 泣いてみる！」

多勢に無勢で明らかに形勢不利にも拘らず赤服の男の子は、決して怯まなかった。怯むどころか口をきつと結び、小さな握り拳で威嚇した。都会っ子の線の細さは微塵もなく、一人で大勢に対峙する剣幕に、怯んだのはむしろ田舎の子供達だった。

「キヤーン キー！ オーヒャー！」

赤服の男の子の尋常でない気迫が、彼等を凌駕したからだ。男の子のある種の妖気が、彼等をして恐怖を抱かせたのかもしれない。集団でなくては対抗し得ない、不可思議な靈気を漂わせていたからだ。

その奇妙な金属的な奇声もさることながら、何といつても全身赤づくめの服からして、西洋の小悪魔の化身のような不安感を醸し出していたからだ。

悪餓鬼どもは、今度は何も言わずに駆け下りてくると、突然他人の出現に気付いて一様に警戒の色を浮かべた。平助のリュック姿に気付かなかった一人が、仲間に小突付かれると、探るような目付きで平助をみて照れた。

「赤 赤・・・」

彼等はそれほど、赤服の妖怪に集中していた。平助を男の子の新手の庇護者と勘違いしたのか、悪餓鬼どもが一瞬たじろいだ。

「どうしたんだ！」

平助は、彼等の警戒心を解く精一杯の笑い顔で問いかけた。

「キヤーン キー！ オーヒャー！」

赤服の男の子は、つられて足を止めたが、怯んだ悪餓鬼めがけて一気に突っ込んで行った。それは行者の唱える奇妙な呪文のようにも聞こえた。田舎の悪童は、弾かれたようにも

う駆けに駆けた。その男の子の奇妙な呪文に、一瞬身裡に悪寒が走り、それが鳥肌のように皮膚の表面に飛び出して小さなぶつぶつを作るのを平助は意識した。

突如!!男の子の赤服の胸に開いた大きなポケットから、こぼれ落ちる物体があった。

物体と観えたのは錯覚で、栗鼠のような小動物である。それは、栗鼠と見間違える程の小さな猫だった。転げるように、男の子を懸命に追い続けるセピア色の小さな丸みのある生物、それは異界の下部の奇妙な猫だった。

赤服の男の子は、平助の真横をいっさんに駆け下つた。小型猫も一緒に駆け下つた。

「キヤテリー！ キヤテリー!!」

数段行つて男の子が立止つて猫を呼んだ。大きな赤い襟の広がり、ことさらはつきりと見えた。猖狂熱の疫病神が、極めて小さい猫を、胸のポケットようやと収納すると、

翼を生やして真一文字に飛んで行った。

膝小僧丸出しの赤いパンツの男の子は、さながら獲物を狙い、風切つて舞い下りる緋色の豹であった。その後姿を見送りながら、小さな怪物の世界から蘇ったかの如く平助は「ほー」と息を吐いた。

下社例大祭は、やまかたのめのみこと八坂刀売命と御子神との遷座祭である。毎年、二月一日と八月一日に執り行なわれ、別名「お舟祭り」とか「裸祭り」と呼ばれている。

この遷座の行列に続いて、青柴を大きく積上げてお舟を擬した輿を作り、下宮主祭神の八坂刀売命に見立たてた緋と紫の衣をまとった人形を、丈夫な藤の蔓で括つて柴舟に乗せ春宮から秋宮に曳行される。この儀式がお舟祭りである。氏子数百人に依つて担がれた青柴舟は、春宮から、秋宮へ曳行され、秋宮の神楽殿を三巡し、神事相撲三番が行なわれて終える。明治初年までは、この青柴舟を裸の若者が担いで練つたので、裸祭りの名も伝わっている。

藤と祭りとの因縁は、このお舟祭りのみならず御柱祭との関わりも深いものがある。

藤蔓と言えば、古墳時代には、石棺を木槨に載せて藤の蔓で曳いた記録もあると言つが、実際、御柱祭の御柱を曳く場合にも、丈夫なこの地方の山藤の蔓が使われていた。

下社を成立たせる春宮と秋宮の遷座の神事の解釈については諸説ある。単に宮殿住み分け説、母神と御子神の表敬訪

問説、神人相嘗・神人相遊ぶ説等である。此処では一番目の表敬訪問説に従うものとする。

その場合このお舟祭りは、八坂刀売命と、御子神の舟遊びを模したものでらしく、青柴は水を意味した魔除であった。六ヶ月毎の遷座の神事は、春宮と秋宮の間を、八坂刀売命が、御子神のもとに逢いに行く、即ち母と子が六ヶ月毎に互いに訪問する仕構という事になっている。

昔は八坂刀売命の人形が着る、緋と紫の衣装は毎年選ばれた四人の少女が丹精込めて縫い上げる慣わしであった。今はその習慣は廃れてしまったが当時、この縫い子に選ばれることは、少女達の大変な名誉であり他人から羨やまれた。縫い子は殆ど皆その年の内に嫁として迎えられたからだ。縫い子の条件は、容姿端麗であることは無論のこと女万般のことが優れてできることが必須であった。

そうして結婚していった少女達が、全て幸福であったかどうか解らない。町を去って異国で家庭を持った少女もいた。頭も良く、器量よしであったから、普通なら約束された人生を送れたはずであるが、それが反って禍となつて不幸にも亡くなった少女もいたのである。

遠くから、この衣装を着た八坂刀売命の人形を見た人は、一様に感嘆の声を上げた。

柴の緑の中に衣装の紫が溶け込んで、緋色だけがくつきりと浮いて見えた。近くでみると、柴の緑と衣の紫がはつきりと別な存在として理解できた。緋色と柴の緑は色彩的には、補色関係であるから、鋭い対比として人に意識させるはずなのに、人形の顔立ちもあつて

か衣装は実に柔らかで穏やかに見えた。その際の紫は控えめに、緋色の後ろに隠れようとする。まるで緋色を、前に押し出そうとしているようだ。安心しきつて頼り切った緋色は、紫の中ですすくと育まれていたようだ。紫の愛がそうさせているのだ。

仏蘭西から諏訪地方にやってきた画家の、ポールの絵は、諏訪の風景でも静物でも、また裸婦と猫の絵でも、視線を何処か遙に遠くにおいて描いているような、日本人には無い圧力を感じさせるタッチに特徴があった。

日本画の淡い淡白な線に慣れた者の胃袋には、ずつしりと重く、牛の肉料理のようにダイナミックで、それでいてじつと凝視していると南仏プロヴァンス地方の匂いまで運んでくるような、郷愁を醸し出す画風であった。小手先でこねくり回すような筆使いに慣れた、洋画ファンの目からすると、独特の濃い紫色の色使いと、空間どりに おやこれは何？ と感じさせるものがあつた。

肉料理にナイフとフォークが必要なように、ポールの絵を鑑賞するには、脂の魂「凝脂」とでも言おうか、人間のもつ生臭い野心、性欲とか食欲を誘発させる感性が必要であった。

本名は、ジャン・ポール・ヴィニールだったが、人々は唯 ポールさん と呼んだ。例え本名を全部聞いたとしても、誰も発音し難いヴィニールは省略したのである。

四十五年前、初来日の時に東京の文化人仲間誘われてポールは信州にやってきた。

諏訪地方の景観を一目みて気に入り、当時は一時期、下諏訪の民宿のような温泉宿に滞在したが、直ぐに地元秋宮の宮司の紹介を受けて、旧中山道沿いで諏訪湖が一望できる慈雲寺の傍に移った。道の右下は春宮であった。未だ青年ポールの感受性も鋭く、血気盛んな二十代の夏の頃である。秋宮の石段出口近くの藤棚を眺めながらポールが散策している

と、一人の美しい少女に偶然出会った。その少女が、ポールが視線を外して居る内に、突然藤棚の中から生まれ出たように思えた。親切にも、ポールを外国観光客と思つてか、秋宮の神楽殿や二重楼門造りの弊拝殿、更に右翼の片拝殿に案内してくれた。当時昭和二十五年の一之御柱だといって、展示してある直径一五センチ、周囲四百センチもあるかと思える太い柱を、誇らしげに説明してくれた。それが、ポールと宮坂希恵子という少女の、諏訪での初めての出会いであった。

諏訪に来て翌年の冬、ある酷寒の夜、ポールは、仏蘭西でも体験したことのない不気味な音を聞いた。諏訪湖の方面からびびしと、まるで闇が裂けるような奇妙な音だった。神話の国の高揚した物怪が、一斉に人間界の醜い争いを諷めるように、湖面に氷鳴りを響かして、一挙に神霊となって押し寄せてくるような音だった。その奇妙な氷割れの音は一晚中聞えていた。

あの時の氷割れの音は、ポールに何事かを確かに、決断させる切っ掛けとなつたはずだ。その音は、一人の日本人女性に恋をして、巴里で子まで成した苦い想い出と繋がって



た。やはりあの時、日本の両親の反対を押し切つて、奪い取るように仏蘭西に連れ帰つたのは間違いだつたのだ、という自責の思いが今もある。自分が諏訪に残るべきだつたのだと……。でも、もし逡巡して二人の男の間で揺れ動く少女の気持を押し測つていたなら、あの時の恋は成就しなかつたかもしれないのだとも思う。

だから十年前の来日は、仏蘭西で急逝した妻の御霊を弔い神の国で償う気持ちもあつて、再来日したのである。ポールは、仏蘭西の両親も捨て、今度は日本に永住する覚悟をしていた。

初来日の時も、そして再来日の現在も、猫の種類が異なるだけで、愛猫家のポールの傍らに猫が居る光景は全く変わりが無かつた。

絵を描く時は常に、キャテリーと言つ名前前の猫を傍に置いていた。初代は、仏蘭西から連れてきたシャルトリュー種の猫であつた。種の由来は、最高級のリキュールの本場として知られている仏蘭西「シャルトリューズ修道院」で昔飼われていた由で、以後仏蘭西では家庭猫として広く親しまれ飼われた種類の猫である。

十年前の再来日以後、物色して諏訪盆地を眼下に見下ろし、八ヶ岳、霧ヶ峰の眺望も楽しめる、諏訪から少し西寄りに離れた、塩尻峠の塩嶺御野立公園の高台に單身住み付いた。しかし、魂を揺さぶるような、あの時の氷割れの音を、未だにポールは一度も聞いたことがない。最も諏訪湖から離れたこの距離では、例え起つたとしても聞えなかつたかもしれない。

ポールが今、自毛で飼っている二代目の猫は、名前は同じキャテリーでも、体形も性格も全く異なる小型のシンガプーラ種である。何故ポー

ルがこのシンガプーラ種の猫を飼うようになったのかは定かではない。

以前飼っていたシャルトリュー種の猫は、肩幅も広く、濃いオレンジ色に輝く目、口元をすぼめて微笑む巴里の貴婦人のようで、やや剛毛気味だつたのに、日本人には馴染まない匂いを感じさせる尿の臭気があつた。

再来日して以後のポールは、頼まれれば諏訪の風景や、静物も描いたが何故か猫の絵を主体に描くようになっていた。

特に、艶然と微笑み、白い裸身を曝す女と、紫色の猫の組み合わせ、裸婦と猫、日本画壇の評判となつた。少女が猫を抱く姿、猫と少女、猫十態と題する、猫と静物、連作等は、巴里で亡くした愛妻の希恵子への鎮魂歌を思わせ、二人を知る諏訪の人々の共感を呼んだ。

石段を登つて秋宮にでるまえに、平助はもう一度鳥居を潜つた。出た場所は秋宮の側面である。石段の出口、社務所前の藤棚を丁度真横から眺める位置にその鳥居があつた。

この藤棚は、この界限では珍しく盛夏に咲く土用藤だつた。新道から上社正面にきて境内を眺めても、この石段出口の鳥居に殆どの者が気付かなかつた。

「宮崎さん！ 米持つてきたし。」

神社裏手に回つて平助は、社務所のガラス戸を開けて中へ呼掛けた。返事は無かつた。

「宮崎さん 宮崎さん！」

平助は、かつて中に入ると、上框にリュックを下ろして外に出た。境内をぶらぶらしてれば神官の宮崎さんに会えると思つた。

宮崎さんは、秋宮十五代目の神官である。

昔秋宮には神官も巫女も大勢いたが、今は神官三人に減り巫女は常時三人しか居なかつた。ただ祭礼の時は巫女は、アルバイトの少女を雇うのが通例であつた。宮崎さんは、神官のくせにペンネーム「御子柴三郎」名で小説なんぞも書いていて、諏訪の同人仲間では知られた存在だつた。神官だからといって、何も小説を書いてはいけないう理屈は無いが、坊さんが書いた週刊誌のくだらないエロ小説を読んだりすると、神官の小説が気になるのだ。宮崎さんも、官能小説を書くのだからと、飲んだ時何時か平助は冗談交じりで聞いたことがある。

平助は、白い袴と薄青の亜麻布の衣服を着ている宮崎さんが好きだつた。神官姿の宮崎さんは、一人で飯を食っている宮崎さんだつた。

宮崎さんは、四五歳にもなつて奥さんも居ない。だが、一向に独身であることに気にする風もない。平助の父親が何回見合いを進めても、何時も笑つて取り合いもしない。

人の噂では、失恋して以来女を近づけないのだと言つが、平助は、それは嘘だと考える。それが証拠に神官の宮崎さんは、多分に女癖も悪く助平で、大いに生臭かつたからだ。

米だつて本当は、買うことになつているのだが、中々金を払つてくれない。平助の父親は、神官長をしていた宮崎さんの御祖父さんにならなくお世話になつたとかで米代を一度も請求したことが無い。

平助の父は、宮崎さんの書く小説を何時も最大級の賛辞で誉め上げた。諏訪から中央の文壇に殴りこみを掛ける人材だとも言った。

父と宮崎さんが呑んだ時に、そんな父の賛辞

にお構いなしに、酔っぱらうと必ず童謡の花嫁人形の唄を歌う宮崎さんだった。

《金襴緞子の帯締めながら・花嫁御寮は何故泣くのだろう……赤い鹿の子の振袖着てる……》

宮崎さんの一人扶持位の米なんて量もしている。平助は思っている。こうして五升の米を持って、時々この石段を登ってくるのが常であった。なによりも、平助は宮崎さんの話が面白かったからだ。

「よおー。平助ー！」

「こんちわー！ご無沙汰で……」

「何時帰ってきた？」

「おととい」

「お前の親父に聞いたら夏休みのバイトで帰って来ねえずらなんて言ってたに」

「その積りだったんだけど」

「やっぱ諏訪は良ずら。東京と違って……」

「まあ、そう言うことだね」

平助は、宮崎さんと交わす久し振りの信州弁に育った者だけが感じる親しみを覚えた。

境内を掃除でもして来たのか、手に箒と塵取を提げていた。そこに故郷に帰省した時に見る何時もの宮崎さんが居た。

平助は宮崎さんと肩を並べて歩いた。

石段を上り詰めた秋宮境内の社務所前に、この界限でも珍しい藤棚があった。通常藤は五月下旬までに咲くのが普通だが、ここの藤は七〜八月の季節はずれの盛夏に咲くので「時じき藤」「夏藤」「土用藤」とも呼ばれていた。熱帯アジア原産といわれ葉は厚く常

緑で、濃い紫の花が上向きに円錐花序に付いていた。蔓性の低木のマメ科の植物を藤棚に仕立てたのは、宮崎さんの御祖父さんだといふ。この夏藤、別名紫夏藤と言ふ種類で珍重され、地元婦人会の手で何時も手入れが行き届いていた。毎年、一見季節外れに思える夏藤を愛でる夏藤祭りが開催されるので、訪れる人も結構多かった。

「おまえ、でかくなつたなあ」

「そりゃそうせ、何時までも子供じゃあるめいし」

「親父さんよりでけえずら。お前のお袋さん、でかかつたからなあ」

宮崎さんに母親似と言われるのが幾分恥ずかしかつたが、確かにどちらかと言えば平助は母親似だった。

「ところでー宮崎さん米持ってきたじ」

「すまん。親父さんによろしく」

「そつか、そんなに学校は面白くないか」

話題は、平助の大学のことに移った。

平助はニヤリと笑いながら、背伸びして力説した。本当は、口で言うほど平助の大学生活がつまらなかつたわけではない。唯宮崎さんにそんな風に話すことで諏訪を離れて東京に行ったという、子供じみた優越感を感じてみたかっただけかもしれない。

「大学には、シャんな女の子は居るか？」

「学校にだかい？冗談じゃない、工学部だもん。女つ気なんか何にも無いぜ」

「そつかおめえ工学部か。知らなかつた。てつきり、おふくろ譲りの文学青年かと思つてたが……」

「もっとも、近くの女子大の寮に、仲間とス

トームを掛けにいったことはあるじ……」

「このいかさま工学士め！色気だけは一人前になりやがってー」

手にした塵取を其処に置くこと子供時代に戻つたように、箒で宮崎さんは平助に打つて掛かつた。平助は笑いながら、身をかわすと宮崎さんの箒の刃を軽くないなした。宮崎さんと一緒に居ると、何故か急に諏訪に帰ってきた実感が湧いてきた。宮崎さんは、藤棚の掃除をしていたのか塵取に紫色の花房が見えた。

「知っているよ。その男の子なら、よく知ってるよ。今母親の両親の実家にいる」

「知ってるだけかい？」

社務所の宮崎さんは、きっぱりとした口調の後、回想するように暫し黙りこくつた。

「……」

「あの変な赤服の気の強そうな男の子」

「気の強い？」

「ああ、地元の悪たれと喧嘩してたじ」

「喧嘩つて、取っ組み合いか？」

「いいや、口喧嘩だ。五人を相手にだじ、宮崎さんー！」

「そつか……我が強すぎる子だったが……」

「周りに、妖気が漂っているような……」

「妖気？妖気かこりゃ良いや！お前上手いことを言つな」

宮崎さんは突然、平助の形容に大口開けて笑つた。平助は、宮崎さんのその笑いの中に自嘲めいた寂しさを感じ取つた。

宮崎さんは、赤服の男の子の素性をすこし喋つたが、肝心な所へ来ると口籠つた。

宮崎さんのその口調に何処か投げやりな、然も語気鋭いものがあつた。平助は、赤服の

男の子のことをもつと聞き質したかったが、それ以上踏み込むと宮崎さんの秘密に触れそうな気がして聞くのも躊躇された。宮崎さんの表情に、何処か聞き出すことを拒む気配があったからだ。

平助は、あの赤服の男の子と、白い神官姿の宮崎さんを一緒に想像した。男の子は夏藤の下で、一人赤い翼を生やして境内を飛び廻り、セピア色のまるで栗鼠のような小さな猫と一緒に飛び回っている。傍らでそれをじつと静観する宮崎さんがいる。宮崎さんが、小悪魔か猩紅熱の疫病神の庇護者として、珍しいその夏藤の下に立っている姿だった。その藤棚の下には、何故かもう一人笑いながら男の子を見詰める端麗な女性の姿を想像していた。

平助は、その日宮崎さんからビールを呼ばれて家に帰った。

諏訪生まれで、今迄外国をおろか諏訪以外の国内の何処へも出たこともない宮坂希恵子が、画家で猫好きのポールに付いて巴里のシャルル・ド・ゴール空港に降り立ったのは、今からかれこれ四十年前程の話である。それは、恋に落ちた若いポールと希恵子の二人にとっても、人生の大きな転機であった。

両親を振り切り、駆け落ち同然で血気に任せた希恵子の巴里行きであった。辛酸は覚悟の上で、味噌臭い匂いの漂う諏訪を飛出した。憧れの巴里と勇んでみたものの、ポールとの生活は必ずしも甘いものではなかった。最初の内こそ、ポールは、シャンゼリゼ、ペール・ラシェーズ墓地、カルチエ・ラタン、モンマルトルの丘、モンパルパルナス界限、凱

旋門、ルーブル美術館等々、一通り観光案内を兼ねて連れ舞わしてくれたのである。

市内をセーヌ川が貫流する巴里には、東西二つの大きな森がある。高級住宅街に近接する西側のブローニュの森、庶民的な雰囲気

の東側のヴァンセンヌの森である。独逸人は散歩の好きな国民と人伝に聞いたことがあるが、仏蘭西人は、恋人や夫婦で、また親子で広場と森に憩う国民だと、巴里に来た当初希恵子は思うのだった。

緊張感で張り詰めてきた希恵子にとって、最も憩いの時期であったのかもしれない。憩うといえ、小さい頃に諏訪の宮坂一族でそつした共に愉しむ時間もあつた。昔同族団だったのであろうが、諏訪地方には宮坂姓が実に多い。宮坂姓の全部が親戚というわけではない。

希恵子の家も、その宮坂姓代々の醸造業と同姓であつたが下請けであつた。酒も造つたが、本業は味噌であつた。同じ姓の宮坂の大手蔵元の下には、希恵子の家の様に信州味噌造りに関係する中小の蔵元が存在した。

余談であるが、諏訪のみならず、信州には同族団が実に多い。例えば稲扱村の川上姓、小野村の小野姓、長野安茂里の丸田姓等である。

巴里生活一ヶ月も過ぎると、借りたアパートマンに夜となく昼となく酔っ払って寄つて来る、奇怪で奇抜で奇妙な・・それこそ奇の字が三つも四つも付く、風変わりな画家仲間や詩人や小説書きと称する異人種との付き合いで、希恵子はすっかり疲れきっていた。

ポールも恋人希恵子を連れて、日本から帰国したが自分の絵は全く売れず、観光客相手に似顔絵書き、キャバレーの看板書き・・お

金になる仕事なら何でもやった。ポールも何処に行くのか、仕事を求めて家に居ない時が次第に多くなり、希恵子是不慣れな巴里生活を一人で過ごす時間を余儀なくされた。

何しろ、巴里在住の美術家だけで当時、十万人もいた時代である。内仏蘭西人が三万人程度、残り七万人は外国人であつたが、小説や詩人を加えれば、もっと多くの芸術家が巴里に屯して(とど)いた。在巴里邦人が約五千人程度の時代であるから、この数は相当な数であつた。もちろん邦人美術家も結構いて、数百人はいたのではあるまいか・・。

全部が成功するとは保障もない絵描き商売、諏訪から持参したお金も次第に底をつき、時には焼きマロン(栗だけ食べて過(と)す日々すらあつた。でも決して諏訪を出てきたことを、後悔はしなかつた。希恵子は、諏訪の寒さで鍛えられ泣き言の嫌いな意思の強い女性であつた。

仏蘭西語は、日常の会話程度であれば、身振り手振りで交わすことができた。食べて行くだけなら、希恵子も働きながら何とか生活できる自信もあつたからだ。現に、アパートマンの女教師の紹介で、サンジェルマン・デ・プレにある美術学校の掃除婦をやつたりした。

でも、世界の人間には、草食人種と肉食人種がいるのだと、改めて希恵子は認識した。

巴里に来たポールは、日本の時と異なり、荒々しい抱擁と接吻をした。しばしば希恵子は、自分の唇が吸い取られるような気がした。肉食人種特有の熱く、チーズ臭い味がした。

小さい時から、諏訪の味噌を飲み淡泊に育つた希恵子にとって、仏蘭西人は正に肉食人種だつた。日本人以上に、野心や野望を抱き、そして



性欲と食欲にも旺盛な人種だった。

そつした巴里には、自分の手に負えない、自分の自信だけでは通用しない、言葉では表現できないある種の「恐れ」が、家の中に充満していると気付いたのは一年もしない内であった。

その漠然とした「恐れ」は、ポール不在で一人で家に居る時は特に、一見何処でも出掛けている道が開けているのに、踏み込むと二度と引き返せない黄泉へ連れていかれそうな死の恐怖感にまで繋がっていた。

ポールが、ある時一匹の黒猫を連れてきた。巴里では路上でも極く普通に見かけるシャルトリュー種の猫だった。この猫と一緒にいると、希恵子の漠然と感じていた家中の「恐れ」の意識が消えて癒された。

ポールの絵が少し売れ始めた頃、巴里の市役所の戸籍係に届けをだして、やっと宮坂希恵子から、ヴィニール・希恵子になった。

南仏の観光地プロヴァンス地方にバカンスに行こうと、ポールが提案したのは、ヴィニール・希恵子になってから更に二年後のことであった。あの時が、二人の人生で一番至福の時間だったのかもしれない。何故なら妊娠して、プロヴァンスから帰って、一年後に息子が生まれたからである。

その日は午前中から暑かった。

季節はすでに緑滴る初夏を通り越して、スツカリ真夏の気配がした。

平助は、石段の冷気を尻に感じながら、本書齋兼昼寝の場所だった。夏の暑さは、高い葉末の空間に舞い、今日は下まで降りて来な

かった。肌の上にべたりと張り付いても来なかった。蝉の声のみ賑やかだった。

平助がふと視線を上げると、この前と同じ石段の上方に緋色があった。森の緑のドアを押し開くようにして、先日の緋色が錯覚でなく、忽然と現われたのである。今度は眼鏡無しでも巫女と勘違いすることもなく、また赤服の男の子との再会だと直感できた。

喚声もなく、上から降るような金属的な呪文もないのだが、平助ははっとして自分の心臓が高鳴るのを感じた。見上げた石段の緑の向こうに、確かに同じ緋色が忽然と浮かび出たがどうやら二人連れだったからだ。

平助が子供の頃にみた上社の祭りの緋の衣装、あのお船祭りの青柴の中にみた八坂刀売命の人形が着ていた緋の色だった。暗緑色の背景の中から、一人の紫衣の女が男の子の手を引いて出現してきた。平助は、口をぽかんと開けて放心のうち二人を意識した。

薄紫色の日傘を差し、赤服の男の子が、一人で石段を下りられるにも拘らず、石段で足を動かす度に、女はちよいちよいと繋いだ片方の手を持ち上げるようにしていた。紫衣の女が横に居ることもう、平助は、男の子に話かけられないような気がした。はたして猫紅熱の疫病神、小悪魔なのか、それとも単に毛唐とのあいの子に過ぎないのか……。もっと男の子の正体を知りたかったが……。

近づいてきた紫衣の女は、感嘆の言葉もなげ程、際立って美しかった。なによりもその服装が洗練され、明らかに土地の者は被らない広幅で緑色の帽子に、首に巻いた白いジョーゼットのスカーフを風になびかせながら、ノー

スリーブの濃い紫のワンピースを無造作に着こなしていた。まるで、仏蘭西仕込みのセクスの良い貴婦人のように平助には思えた。

上背は幾分小柄だが、申し分のない巴里の気品を漂わせ、日本人としては珍しい眼窩の深い顔立ちで、ナイーブな髪の毛が、木漏れ日に燃えるように輝いていた。

男の子の切れ長の大きな眼は、その女の眼と酷似していた。平助にはその紫色の衣装を着た女は、母親であることは明らかなのだが、まるで紫夏藤の精霊のように思えた。ひよつとして八坂刀売命の化身なのかとも思えた。

男の子の服と帽子の赤が、女のワンピースの藤色の紫に支えられ、石段の暗緑色を背景にして、二人の回りだけが、木漏れ日に映えてひと際鮮やかにオーラを発して輝いていた。「よいしょ！ よいしょ！」

二人は、互いに声を掛け合いながら石段を下りてきた。平助は、あたかも崇高なものでも眺めるように立ち上がって二人を迎えた。

藤の精霊を眼前にして、女とまともに目が合わせられなかった。赤シャツと赤パンツはこの前観た時と同じ服装であったが、今日のその男の子は加えて少女の被るような、赤い帽子を被っていた。胸の大きなポケットから愛くるしい小さな猫の顔が覗いていた。ポケットは小さい愛猫専用のように観えた。

でも男の子は穏やかな気を発散して、女が手を離れたら、この前出会った時のように、小さな猫と一緒に翼を生やしてそのまま飛び去って行きそつに見えた。男の子は、少し首を斜めにして、気恥ずかしそつに平助を観た。

猫のくるっとした丸い目が、同時に平助

を仰ぎ観ていた。男の子が平助に笑い掛けたと思つたのは、錯覚だったのであろうか。

平助は半ば放心のうちに緊張して、何となく物怪めく二人を神々しく見送つた。

平助の立っている位置から、数段下の石段迄いった時、男の子は寄り添う女を見上げて、  
「おかあさま!」

「おかないだの おにいちゃま!!」  
「おかないだの おにいちゃま!!」  
今度は、反応を確かめるように探るように男の子は、女の顔と平助を見比べた。猫の顔も連動して、女の顔と平助を見比べた。平助は、思わず振り向いた藤の精霊のような女を拝むように深々と会釈をした。

二人とも平助をみて笑つたように見えた。奇妙な二人連れと一匹の猫は、平助の存在等全く意に介さず、そのままずんずん石段を下りて行き、忽然と姿が見えなくなった。

平助は、心の裡で  
《こないだの、お兄ちゃま》  
と呟いてみた。

急に身体中がこぼれくなくなつて妙に嬉しかった。老綾杉の葉末から、蝉時雨が石段に降っていた。

黒澤平助の奇妙な体験は、此れ一度きりで終わった。以後、この石段の上方に緑のドア

が開いて、妖気めく赤服の男の子と、藤の精霊のような母、奇妙な物怪母子二人連れの姿が現われることは二度と無かつた。

もちろん敢えてこの石段での出来事の一部始終を宮崎さんに報告し、母子のことを問い質すこともしなかつた。平助は大学最後の帰省の折、石段を登り、「時じき藤(夏藤)」の藤棚の秋宮境内の社務所に宮崎さんを尋ねたことがあるが、東京で就職してからは、殆ど諏訪に戻ることをしなかつた。

数年後、同人誌「諏訪湖 掲載の御子柴三郎作の小説「赤服の男の子」が、第十六回の北関東文芸家協会の最優秀作品に選ばれた、という知らせを諏訪の父から受けた。父から送られた、御子柴三郎のその作品を読んでみた。舞台は諏訪の御柱祭で私小説だった。

祭礼の衣装を縫つ縫い子に選ばれた娘は、仏蘭西の画家との子を産んで巴里で亡くなるのだが、平助にはある意味、宮崎さんの妻帯しない理由が理解できた。前段から作品は、どろどろした深刻な男女の三角関係の愛憎劇を描き、諏訪から巴里に飛ぶ謎解きになっていた。宮崎さんが酔つと必ず唄つた童謡「花嫁人形」が、小説にも描かれていたので、秋宮十五代目神官をしていた宮崎さんの心境が痛い程良く分かつた。

平助は、宮崎さんに心ばかりの祝いの品として、丸善でモンブラン製の太目の万年筆を購入して贈つた。丸善の店員が、受賞祝いの文字を万年筆に彫ることを進めたので、「祝、時じき藤の宮崎さん受賞記念」と彫ってもらつた。

万葉集にある大伴家持の詩を思い出した。  
わがやどの時じき藤のめづらしく

今も見てしか妹が笑まひを

「祝、物怪めく時じき藤の下で受賞」と本当は彫りたかつたのだが止めた。

簡単な宮崎さんの礼状を勤め先で受理したがそれ以来、四十年後の今日まで、石段に現れた物怪母子に精気を吸い取られてか、宮崎さんの作品が中央文壇で、これと言つた何かの賞を受けたという噂を、黒澤平助は一度も聞かなかつた。でも、毎年夏がくる度に、秋宮の社務所前で時期はずれに咲く、「時じき藤」の藤棚の事を平助は想い出していた。

女性の老いや死を単独孤高の鋭い感性や情念で歌い上げ、物怪の霊を強く宿した俳人三橋鷹女の句に夏藤を詠んだ句がある。  
夏藤やおんなは老ゆる日の下に・鷹女

平成十六年・甲申の年に、御柱祭が諏訪大社で盛大に実施された。きつと、多くの物怪の群れが甦つたに違いない。

第五話 了

御柱や時じき藤の影の濃き・踏基

### 参考文献

- 「図説御柱祭」上田正昭監修者 郷土出版社
- 「御柱祭と諏訪大社」五人の共著 筑摩書房
- 「御柱の話」諏訪史談会編 蓼科書房
- 「エトルパリの日本人野郎」玉川しんめい著 朝日新聞社
- 「作家の条件」森村誠一著 講談社
- 「藤なんでも百科」藤だより藤つくし藤つくり「春日部市

全編(第一話)第五話 完